

# マラカンド野戦軍

辺境戦争における一エピソード

ウインストン・スペンサー・チャーチル卿

マラカンド野戦軍

序文

「辺境戦争とは文明化の波の先端、そしてその進展を示すものである。」  
ソールズベリー卿、ロンドン市庁舎にて、一八九二年

「世界の公明正大さに従い、私に観客を与えよ」

「ジョン王」第五幕・第二場

ふだん私は序文というものを軽視している。もし著者が二、三〇〇ページもの文章を費やして、読者の心を捉えることも、本を書いた目的を説明することもできなかつたら、おそらく序文の五〇行かそこらでは何もできないだろうと思っている。しかし、一言二言何か喋りたいという誘惑は今も昔も非常に強いものであり、多くの著者はこの誘惑に抵抗できない。私もまた同じだ。

私はかつてマラカンド野戦軍に所属していた。その頃、ロンドン・デイリー・テレグラフ紙に一連の原稿を書き送った。これらの原稿は好意的に受け入れられた。私は大いに励まされ、さらに多くの原稿を書き送った。この本はその成果である。

私はもとの原稿をばらばらにして、自由に、適切と思われる一節、フレーズ、事実を活用することにした。文章・フレーズ・事実に含まれる観点に変更はない。しかし、いくつかの意見や表現は、宿営地の爽快な雰囲気の中では穏やかなものに思えたのだが。現在のより穏やかな雰囲気にはそぐわなくなつたので、変更した。

私は多くの勇敢な将校たちが取材に協力してくれたことに感謝しなくてはならない。将校たちは名前を明かさずに私に求めた。しかし、この頼みを受け入れてしまうと、マラカンド野戦軍の話から勇敢な行動と最高の個性とが奪われてしまうだろう。

この本では辺境問題の難しさを扱うつもりもなく、辺境問題の局面や特長の完全な概要を示すつもりもない。最初の章で、私はインドの辺境に住む数多くの有力部族に共通してみられる特徴を描き出そうとしている。最後の章で、私は平凡な人物の知性を専門家による莫大な量の証言（それはあまりにも莫大なもので、記憶を混乱させ、忍耐を強いるもののだが）に適用しようとしている。残りは物語であり、その物語の中で私は見たままのことを読者にお見せしたいと思っている。

本文の中では、全ての出来事を描き出すことができなかつたので、付録に公式文書を含めておいた。

大英帝国の抱える問題について、私は某政党のパンフレットに書いたことがある。しかし、この内容が英国民を侮辱するものではない、ということとは公平な目で見れば受け入れられることだろう。私は起こったことをそのまま事実として、またその出来事から感じたことをそのまま印象として記録してきた。特定の個人や主義を糾弾するような意図は全くなかつた。確かに私は誰も攻撃しないようにと思ってきたのだが、あらゆる者を攻撃してしまつたかもしれない。中立性は恥ずべき孤立へと暗転することがある。読者からの良い意見が私の主たる野心において、そしてその完成において唯一の支援だつたように、真実を見極めようとする誠実で偏りの無い努力は私の唯一の防御策である。

## 第一章 戦争の舞台

ギルザイの部族長はこのように返事を書いてきた…「われわれの道は狭く、切り立っている。太陽は烈しく谷を焼き、雪解け水は谷深く流れる。…よそ者には安全なエスコートと勇敢な友の誓いが必要である。」

「首長（アミール）からの手紙」 ▲ ライアル卿

インドの北および北西の辺境に沿って、ヒマラヤ山脈が広がっている。ヒマラヤ山脈は大昔の地殻変動によって生み出された地球表面の巨大な障害物である。幅四〇〇マイル近く、長さ一六〇〇マイル以上にわたって、この山脈は中央アジアと南アジアの平原を分離し、あたかも海峡が向かい合う海岸を引き離しているように、大英帝国の東方領土とロシアの領土とを分割している。この大地の隆起の西端はヒンドウークシの峰々によって構成されている。その南側が本書で何ページにもわたって展開される話の舞台である。

ヒマラヤ山脈は線ではなく、山々から成る偉大な領域である。デイル、スワット、またはバジヨールの山道あるいは指揮所に立つ者は、大西洋のうねりにも似た、見渡す限りの大地の隆起を見る。そして、さらに遠く、さらに高い場所に、白い冠を戴いたブツポウソウを思わせる輝く雪の山頂を見る。毎年降る土砂降りの雨は山々の側面の土壌を洗い流し、無数の水流によって奇妙

な溝を形成し、また、そこかしこに黒い原始の岩を露出させている。沈泥や堆積物は谷を埋め、上から下まで広い範囲にわたって、谷の表面を砂だらけにする。また雨は、この柔らかい沈殿物の間に、広く、深く、そして常に変化し続けながら流れる水路を形成する。雨によって形成された水路は深さ七〇フィート、幅二〇〇〜三〇〇ヤードに達することがある。これらの水路はインドではヌラーと呼ばれる。小さいものは普段は乾いており、大きいものにはのみ水が流れている。しかし、雨期になれば、豊富な水が全てのヌラーにあふれ出し、二、三時間の間に小川は渡れないほどの急流になる。河川は渦を巻いて岸を削る奔流になり、年々、水路の深みを増していく。

山々は谷床から急に立ち上がっている。山々の急でごつごつした斜面には大きな岩が厚く散らばっており、ところどころに草が蔓延っている。高い尾根には松がまばらに生えている。水路にはたまに、ロンドンの公園やパリの大通りのプラタナスの東洋版ともいうべき美しいチェナーの木が見られる。チェナーの木は心地よい木陰を提供するので、人々はこの木に感謝の意を表する。山の斜面の上方には、長らく忘れられた人々によって作られた狭い段々畑がある。これらの段々畑は雨によって土壌が流出するのを防ぎ、大麦やトウモロコシの栽培に使われる。川の両岸に沿って広がる稲田は、幅広く曲がりくねった鮮やかな緑色の空間となり、山々の悲しい色ばかり見ている目をひと時休めてくれる。

春になると、谷は野生のチューリップ、牡丹、クロッカス、そして数種類のポリアンサスといった花々によって光り輝く。そして、人の手が入っていないにもかかわらず、スイカ、小さなブドウ、桑の実といった素晴らしい果実が得られる。しかし、これからこの本で語られる従軍期間中、夏の暑い太陽は全ての花々を焼き尽くしてしまっており、ただわずかに、玉虫織りの絹のように、光によって青や緑に色を変える羽を持つ華麗な蝶だけが、地形の厳格さに対して対照をなしていた。

しかし、言うまでもないが、谷は決して荒野ではなかった。土壌は豊かで、雨量も多く、土地の多くは耕され、住民に必要なものを十分に供給していた。

川には魚が多く生息し、マスやマハシアもいた。岸边にはコガモ、ヒドリガモ、野鴨が、そして場所によってはスナイプがたくさんいた。山に行けば、ヤマウズラ的一种、チコールやキジの仲間が獲れた。

ハンターたちは、この地域の野生動物の中でもとくにヒゲマ、クロクマ、時として、ヒョウ、マーコール、そして数種類の野生ヤギ、ヒツジ、アンテロープ等を狙っていた。より小さい四足動物としては、野ウサギやアカギツネがいた。これらは非常に明るい色の毛皮を持っているとい



う点でのみイギリスの品種とは異なっていた。また、とても興味深く珍しい種類のラットもいた。美しさに欠けるものの、無益ではない動物としてアクリイが良く見られる。しかしもつともよく見られる動物は、三フイートはあろうかというおぞましいオオトカゲである。これは皮が弛んだクロコダイルに似ており、腐肉を食べる。以上の動物たちに、飼育されている鳥、ヤギ、ヒツジ、そして牛、さらにいつも見かけるハゲワシ、また時々見かけるワシを加えればこの地域の動物を網羅することができる。

これら全てのものの上に、明るく青い空と強烈な太陽が存在している。これが戦争の舞台の光景である。

この荒涼としながらも豊かな渓谷に住んでいるのが、似たような特徴を備え、似たような状況に置かれた多くの部族である。暖かい太陽、大量の雨、肥沃な土壌によって育まれた膨大な量の作物によつて、好戦的な無数の人々の生活が支えられている。種まきと収穫の時期を除いて、常にこの地域全体には確執や闘争が繰り広げられている。部族同士が戦争を展開している。ある谷の住人は隣の谷の住人と戦う。個人間の戦闘に村落間の争いが加わる。あるカーン（領主）は家臣の支援を受けながら、別のカーンを攻撃する。どの部族民も隣人に対し、血の復讐を誓っている。どの男の手も他の男に向けられており、全ての男の手はよそ者に向けられている。

また、これらの鬭争は、戦鬪に明け暮れている他の種族が持つような遅れた武器によって行われているわけではない。ズールー族の獐猛さにアメリカ先住民の狡猾さとボーア人の射撃技術が加わっている。「無慈悲な文明の力」というぞつとするような光景が展開されている。旅人は一〇〇〇ヤードも移動しないうちに後装式ライフルで狙撃される。狙撃者は倒れた旅人に近づき、南海の住民のような獐猛さで旅人を切り刻む。一九世紀の兵器が石器時代の蛮人たちの手にあるのだ。

殺人につながるようなあらゆる影響、あらゆる動機が山岳民を悪逆非道な暴力行為に駆り立てる。人類が受け継いできた太古からの強い殺人性向が、この溪谷では他に類を見ない強さと勢いで保存されている。彼らの宗教、それは全てのものの上に君臨し、剣によって布教されたものである。その教義と原理は殺戮への衝動を駆り立てるものであり、三大陸において戦鬪人種を育ててきた。彼らの宗教は山岳民を野蛮で無慈悲な狂信的行為に駆り立てる。山岳民の性質の一つ、略奪欲は、南部の都市や平野が見せる豊かさや豪華さによって育まれた。かつてのスペインにも劣らない几帳面な社交儀礼がコルシカと同じくらい執念深い復讐心によって支えられている。

そんな社会状況では、全ての財産は暴力によって獲得される。すべての男は戦士である。男は

封建領主の兵士のように、あるカーンの家臣であったり、中世の中産階級のように、所属する村落の武装勢力の一員であったりする。そんな状況下であるので、私たちはさしたる困難も感じずに、一人の野心的なパサン族の男の興亡を思い浮かべることができる。

最初、その男は、かつての持ち主を追い出して以来所有している土地の一面で、農学者のような熱意と儉約精神を持つて農業を営んでいる。彼は密かに金をため、ある豪胆な泥棒からライフルを購入する。そのライフルは泥棒が命がけで辺境警備の駐屯所から盗んだものだ。農学者のようだった男は人々から恐れられる人物になる。彼は自宅の隣に監視塔を建て、周囲の村人たちを威圧する。やがて村人たちは彼の権威に屈服する。今や男は村を支配している。しかし、彼はさらに高みを目指す。彼は、あるカーンの城館に対する襲撃に加わるよう、村人たちを説得したり強要したりする。襲撃は成功する。カーンは逃げるか殺されるかする。城館は占領される。カーンの家臣たちは征服者に従うことにする。土地所有は封建制度そのものである。土地所有が認められる代わりに領民たちは新たな支配者の軍役に就く。もし、この新支配者がよそのカーンたちよりも領民を大切に扱わなかったら、領民たちは武器をよそに売り払ってしまうだろう。新支配者は領民たちを大切にす。人びとは新支配者を頼る。新支配者はさらにライフルを買い集める。彼は周辺の二、三のカーンを屈服させる。今や彼は地域の権力者である。

多くの、いや多分すべての国家はこのようにして成立してきた。また、これは文明が初期段階

で酷くもたついているところでもある。しかし、この山岳地帯では、人々の好戦的な性質、抑制への憎悪が、文明の次の段階に進むことを阻んできた。私たちは、有能で大胆で勇氣のあるパサン族の男が権力を握るために戦い、敵を吸収し、融合し、より複雑で相互依存的な社会を築くところを見てきた。彼は今のところ成功している。しかし、彼の成功は滅亡へと転じる。ある敵対組織が男の前に現れる。周囲の部族の族長たちとその信奉者たちが村民たちの支持を得る。この野心的なパサン族の男は数に押され、打倒される。勝者たちは口論の挙句、すべてを台無しにする。そしてこの話は始まった時と同じように血と暴力の中で幕を閉じる。

これまでに話したことから想像がつくように、生存条件は各部族が武装し、定住している場所に関わっている。もしある部族が谷あいに住んでいけば、彼らはマスケット銃用に開けた狭間を持つ塔や壁に守られていなければならない。小山の窪みに住んでいる部族は初めから有利な場所にいる。頑強で、勇敢で、十分な武器を備え、常に戦争で鍛えられた武装民によつて守られている部族もある。

常時騒乱が起きているせいで、怪我など気にかげず、生命を軽んじ、安易に参戦するような氣質が形成される。そして、アフガン国境の部族民は、感情を見せずに戦い、気に病まずに殺戮をするような人間となる。このような氣質に、法や権威への敬意の欠如や平等性の確信が加わって、

英国との軍事衝突が頻発する原因となつてゐる。ささいなことで敵意が生じる。彼らは突然、国境の駐屯所を襲撃する。そして撃退される。彼らの観点では、これでこの戦いは終了である。彼らの最悪な運命論の中では、公平な戦いがあるだけである。彼らは「政府（シルカール）」がこうした事件を大げさに取り扱うのが理解できずに悩む。だからモーハンド族が越境した場合には、シヤブカドル城塞が応戦すればそれで終わりのはずである。彼らは政府が勝利だけで満足せず、彼らの領土を侵略し、罰を課すことに驚き、悩む。またある時、マムンド部族は、ある村が焼かれたという理由で、第二旅団のキャンプに夜襲を仕掛ける。マムンド部族にとつてはこれで帳消しのはずである。マムンド部族は第二旅団がそれを認めないので驚く。

彼らは、お互いに争つてゐる時には多少の遺恨に耐えるし、仲間の死を乗り越えて敵と友情を育むことも稀ではないし、祭りや競馬などのために作戦を中止することもある。戦いの後には、即座に親密な関係が再構築される。矛盾に満ちてゐるといふのが彼らの性質なので、親密さと一族の血の復讐の誓いとが併存することになる。彼らの倫理体系では裏切りや暴力は悪徳というよりも美德と見なされている。彼らの倫理体系は論理的な頭では理解できない、奇妙で一貫性のない社交儀礼を生み出す。もし、ある白人がこの倫理体系を完全に把握し、山岳民の心の動き、例えば、どんなときに白人の味方をするのが山岳民にとつて名誉なことなのか、逆にどんなときに白人を裏切ることが名誉なことなのか等々を理解したならば、その白人は状況を判断しながら、

山から山へと無事に移動できるだろう。しかし、文明化されたヨーロッパ人の多くはこのような芸当を実践できないだろうし、この、まるで顕微鏡で見る微生物のように、共食いし合つて悦に入っている奇妙な生き物の感情を理解することもできないだろう。

私はパサン族の好ましい気質の一つである、女性たちの特権について喜んで述べたい。これは荒っぽい騎士道精神に影響されたもので、絶え間ない争いの中でも順守されている。多くの城塞は水たまりや泉からある程度離れたところに建てられている。城塞が包囲されたとき、守備側の女性たちは、攻撃側の兵士たちから、夜間に水を汲み城塞のふもとに置くことを許される。朝になると、守備側の兵士たちは、砲火の下、その水を取り、抵抗を続けることができる。しかし、軍事的なことから社会的なことへと話題を転換すると、女性たちの生活は暗く、どんな美德を以てしても救いのないものとなる。彼女たちはむさ苦しい、穴の開いたあばら家の中、汚れと無知に囲まれて暮らしている。人間性の淵にいるどんな民族よりも劣っている環境で、虎のように熾烈で、しかし虎の様には清潔ではない生活を、危険で、さほど優雅でない生活を送っている。理想主義者が原始的な人々が常に備えているものと考えているような、家族の素朴な美德というものは全く存在しない。妻やその他の女性たちには動物と同じような地位しか無い。女性たちは自由に売り買いされ、場合によってはライフルと交換される。

山岳民たちの間では嘘がまかり通っている。ある典型的な事件によって、彼らが宣誓というも

のをどう考えているかということがわかる。土地の境界を巡る争いではいつも次のようなことが起こる。紛争当事者はコーランを携え、絶え間なく誓いの言葉を唱えながら、自分の主張する境界の周りを歩いて回る。誓いの言葉を唱えながら境界を侵すことに困難を感じたら、紛争当事者は自分の土地の土を靴に入れて、紛争相手の土地に足を踏み入れる。紛争当事者同士、両方ともこのようなトリックに通じているので、鬱陶しい嘘の宣誓はいつも早々に放棄され、力による解決に移行する。

全ての山岳民は鬱陶しい迷信にとらわれている。ジアラット、つまり聖廟の力は絶大である。病気の子供たちは水牛の背に乗せられて、六十から七十マイル程度運ばれ、聖廟の前に置かれる。そして、もし子供たちが帰りの旅路で命を落とさなければ、ということだが、子供たちは行きの旅と同じように運ばれていく。哀れな子供が水牛の背に揺られながら苦しんでいるのを想像するのは辛いことである。しかし、山岳民はこの措置は、異教徒のもたらすいかなる治療法よりも有効であると考えている。杖を突きながら聖廟に赴くことは願いの成就を確信させるのに十分である。座って石や色のついたガラスのボールを揺らしたり、紐で木からつるされたり、修行僧によって木に縛られたりすることは、良い跡継ぎの男子を得るための確かな方法である。牛によい牛乳を出させるためには、聖人の墓の近くのお気に入りのお石に漆喰を塗らなくてはならない。これらはほんの一部の例にすぎない。しかし、文明人が笑うべきか嘆くべきかわからないような精神

の發達レベルを知るためにはこれだけで十分だろう。

山岳民の迷信によつて明らかになるのは、「ムラー」とか「サヒブザダ」とか「アクンザダ」とか「ファキール」とかいつた無数の聖職者の横暴さである。これに、放浪する「タリブーウルイルム」のホストが加わる。「タリブーウルイルム」というのはトルコの神学生にあたるもので、人々の施しで生活している。さらに聖職者たちは「初夜権」ドウワ・デュ・セニエル (*Droit du Seigneur*) を享受しており、人妻でない者たちや娘たちは彼らから逃れることができない。聖職者たちの立ち振る舞いや道徳は口にするものはばかられるぐらいだ。マコーレーがウィッチャリーの劇について言ったように「彼らは、スカンクが獵師から守られているように、批判者から守られている」。彼らは「安全である。なぜなら彼らは触れることができないぐらい不潔で、近づくことができないぐらい悪辣だからだ。」

しかし、こんな野蛮な人々の生活であつても、美の愛好家が山岳民の希望や恐怖に共感を持つようなひと時が全くないわけではない。夕べの冷たさの中、アフガニスタンの山々の陰に太陽が隠れ、谷合が素晴らしい黄昏に満たされるとき、村の老人たちは水辺のプラタナスの木へと歩き、男たちはライフルを磨き、あるいは水タバコを吸い、女性たちはビーズや丁子や木の実で粗野な装飾品を作り、ムラーは夕べの祈りを唱える。わずかな白人たちがこの光景を見、戻つてこの光



景を話す。

しかし、山岳民の間には、武器や家畜の値段、収穫の見込み、村落でのゴシップから、年々南から迫りくる列強の情報まで、様々な事柄が話題に上っていることが想像できる。多分そこには、かつてセポイ（傭兵）だったベルチ族やパサン族の男もいて、ペシャワールのバザールでの冒險を思い起こしたり、かつて仕え、共に戦った白人将校のことを語ったりしていることだろう。元傭兵は白人たちの危険をものともしない武勇、彼らの奇妙なスポーツ、広範囲に及ぶ「政府」の力（その政府は幾月経とうとも元傭兵に対して恩給を定期的に支払うことを決して忘れない）などについて語るだろう。元傭兵は聞き手に対して来るべき日のことまで予言するかもしれない。やがて自分たちの住む谷合も強大な機械に支配され、裁判官や徴税官や弁務官がアンベイラの統治に來たり、ナワガイの地租を決定したりするだろうと。

するとムラーは声を上げ、聴衆に過ぎ去った日のことを思い出させるだろう。かつて預言者の息子たちが異端者をインドの平原から追い出し、デリーの地に拠点を置き、カフィール族が現在支配しているのと同じくらい広い帝国を治めていたことを。また、真の宗教が誇らしげに世界に広がり、山々においても無視されたままではいらなかったことを。またかつて、強力な支配者がバグダッドを治めていて、全ての男たちが唯一の神だけがあり、ムハンマドがその預言者であることを知っていたことを。ムラーの言うことを聞いていた若い男たちはマティーニのような酒をつかみ、アラーに祈ることだろう。侮辱され脅かされているイスラム教徒に加勢するよう、い

つの日かアラールが遙か彼方から指導者をもたらすようにと。

というわけで、この国の一般的な景観と住民の特徴を簡単に描写した。今の段階ではより詳しい記述は必要でもなく、望ましくもない。これから叙述が進むにつれて、読者は陰鬱な山々やその陰に住む人々について、より生々しい印象を感じ取ることだろう。

私が語らなければならないのは、ある辺境紛争についての話である。問題の重要性においても、戦闘員の数においても、ヨーロッパにおける戦争には及ばない。この辺境紛争の結果は諸帝国の命運を左右しない。しかし、この物語は多少は興味を誘うだろうし、考察の材料にもなるだろう。

文明国間の争いでは強大な軍隊、何千と言う強者が衝突する。いくつもの旅団や大隊が急ぎ立てられ、戦闘区域に到着し、集中砲火や密集した銃兵によって薙ぎ払われる。何千何百の兵士が負傷し殺される。生存者は啞然茫然とした状態で、近くのを隠せる場所に逃れようと必死にあがく。後方から新たな兵士が次々に投入される。やがて敵味方どちらかが撤退する。この混乱、この大規模な殺戮の中では個人やその感情は無視される。軍隊だけが物語の対象になる。そんなスケールの出来事の中だけでは、人間の希望や恐怖、強さや弱さは区別できないかのようなのである。騒音と塵埃の中では破滅以外はほとんど見分けがつかない。

しかし、辺境の朝の鮮明な光の中、山腹に点々と煙が立ち上り、刀剣によって山の峰が輝くと

き、もし観客がいれば、彼はあらゆる種類の人間の勇猛さ、例えば、ガーズィの野蛮な狂信性、シーク教徒の冷やかな運命論、英国軍兵士の頑強さ、英国軍将校の悠々とした大胆さ、などを観察し、それらを正しく認識することだろう。観察者は献身、自己犠牲、冷めた皮肉、厳しい決断などの出来事について何か述べるだろう。観察者は荒々しい情熱、野蛮な怒り、周章狼狽の瞬間を共有するだろう。司令官の技量、兵士の質、兵法の普遍の原理、といったものがまるで歴史の舞台に置かれたかのように明白に展開されるだろう。統計学的スケールではないというだけだ。

一杯のシャンパンは高揚した気分をもたらす。神経は安定し、想いは快く回り、機転はよく利くようになる。瓶丸ごとの酒は逆効果である。飲み過ぎは昏睡状態を引き起こす。戦争についても同じことが言える。酒も戦争もわずかに味わうことでそれらの質が良くわかる。

私は、マラカンド野戦軍の軍事作戦を記録し、その政治的な結末を追い、そしてもし可能ならばインド高原の風景と人々を描き出したいと思う。本書は勇敢で有能な人々の行動の記録となるだろう。本書は国境戦争の偉大なドラマに別の視点を投げかけるだろう。本書は、わが民族が永遠に継承していくかのように思える帝国のために絶え間なく繰り広げられている戦いの中の一つのエピソードを描き出すだろう。本書はいい暇つぶしになるだろう。しかし、私の野心は、この本が民主制下の大英帝国が海外領土に対して持ち始めた興味をわずかであっても刺激するこ

マラカンド野戦軍

と  
で  
あ  
る。  
。

(二〇一三年七月三〇日、福代和宏仮訳)